

体験的な学習を通して、問題解決能力を高める指導の工夫

——— 地域との交流体験を取り入れた学習指導の工夫 ———

足利地区中学校教育研究会 技術・家庭科部会

1 はじめに

現在、社会では少子化や育児放棄など、保育に関する様々な問題を抱えている。平成11年7月の総理府による意識調査では、30代以下の女性の2割以上が「結婚しても必ずしも子供を持つべきだとは考えていない」と答えている。また別の調査でも、若い世代の中には将来は子供は産まないで、自分のペースで自由に生活がしたいと考えたり、子供を持つことをためらう人も増えているという結果が出ている。これらは大人の生活の視野に子供がいらなくなってきていることを示唆している。人間として必要な愛情や思いやりなどの情緒は、幼児期からの大人と子供・子供と子供のコミュニケーションから育っていくものであり、大人が子供に関心をもたないと、心の発達に影響を与えてしまうことも考えられる。すでに家庭や地域においても、人と人との接点が少なくなり、幅広い年齢層とのかかわりも希薄になっている。最近の社会のニュースを見ると、幼児虐待の件数が増え、少年たちによる陰惨な事件が報じられている。学校などの集団生活の中でも突発的に見境のない行為に及ぶ生徒がいたり、主体性のある言動や豊かな感情表現に乏しい場面を数多く見ることがあるが、これらもコミュニケーションの不足による情緒不安定が原因の1つになっているのではないだろうか。

このような社会背景を正面から直視し改善を図るために、新学習指導要領が平成10年に告示された。技術・家庭科では従来からめざしていた方向である『生活』が大きな視点となった。また、それまでは大切とされていながらもプライバシーの配慮から、家庭での生活については遠慮がちであったが、今回の改定では家族のあり方や家族の人間関係が強調され、『家庭の役割』を前面に出している。さらに選択の領域であった『保育』が、精選された形で『家庭分野』に移行し、家庭生活を支える柱として、その重要性が明確になった。そこで、将来を担う中学生が保育学習を通して学んだことを、現実的生活の中で実践できるように支援していきたいと考えた。

足利地区でのこれまでの研究は従来の『保育領域』の流れに即したものではあるが、これからの家庭科教育が目指すものを意識しながら研究をまとめてきた。

2 研究主題設定の理由

学校教育は今、大きな転換を目指して準備を進めている。これまでの知識の一方的な伝達や受け身的な学習の仕方から、『自ら考える力、豊かな個性・人間性を育む』教育に向かおうとしている。多様な情報・価値観のある社会は、これからますます変化が予想されるが、子供たちにはそれに対応できる知識、倫理や感性、創造性、技能、実践力が必要となる。

これまでの保育の授業で、指導者が共通して感じていたことは、生徒が学習に意欲や興味・関心をあまり示さないということであった。授業に入る前のアンケートでは、つぎのような傾向が見られた。

自分の家や親戚に乳幼児がいる生徒は46%で、約半数は機会があればかかわれる環境にあるということである。また、中学生になってから乳幼児とかかわった経験は男子は54.6%、女子が71%と男女差はあるが、おおむね何らかのかかわりがあった。しかし、乳幼児は好きと答える女子の75.5%に比べ、男子は31.3%であり、さらに保育の学習に興味・関心があるかの質問では、女子が56.1%、男子の12.9%があると答えている。一方、興味・関心がないという男子は42%にもなる。学習のスタート地点から興味・関心の点ではっきりと男女差が見られ、平成7年度のアンケートからこの傾向は変わらない。

「学ぶ」意欲には、生徒がもともと潜在的にもっている興味・関心がある。その学習の内容が合致した時、学

習への期待と意欲が大いに高まると考える。また、それまで自分の生活の中では興味・関心のない事柄でも、意外性や新しい出会いなどのきっかけによって刺激を受け、疑問をもったりもっと知りたいという思いが発生する事もある。実際の五感を駆使した体験や実践が、「学ぶ」意欲の土台づくりには必要であると考えた。

新学習指導要領でねらいとしている、「生きる力」の育成のためには、学ぶ対象となる幼児とかかわりをもち、主体的に自分の課題をつかみながら、自らの手段や方法で、解決する学習過程を体験することが重要であると考えた。

これらのことから、『保育』領域ではできるだけ多くの体験学習を取り入れ、生徒の生活の視野の中に『幼児の姿』をとらえさせることが、学習のねらいに迫る手段であると考えた。また、地域と接点をもつことで、生徒は社会の中の自分の存在に気づくことができ、地域も中学生に関心を寄せ、自信をもって教育に参加してくれると考え、これを研究の主題とした。

3 研究内容

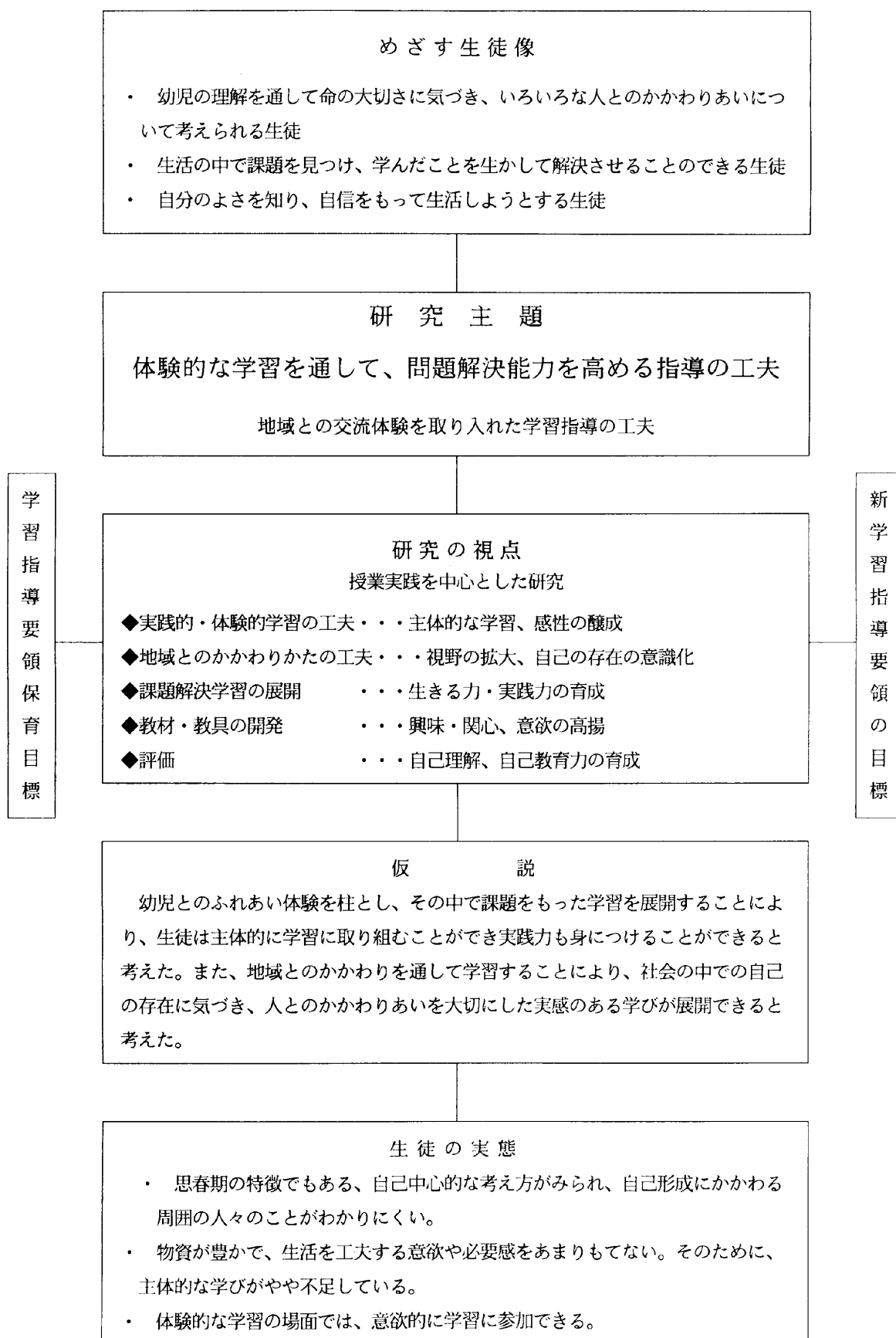
(1) 研究の基本的な考え方

本地区では平成7年度から『保育』領域の研究がスタートしたが、男女共修で保育学習を実施している学校は、市内11校中3校であった。年々男女共修で授業を実践する学校が増えてきたが、アンケートの結果からもわかるように、保育学習への興味・関心に男女で差があり、大きな課題となった。実際の生活から離れがちな学習内容であるため、できるだけ「幼児の姿」が見える授業になるように研究を進めてきた。

保育の授業の中で幼児とのふれあい体験をできる限りもつことで、生徒の意識が変わるということは、これまでの実践から感じている。しかし、時間・場所・人数・その他の事情で保育実習が実施できなかつたり、受入れ側との行事の調整の困難から1回のみの実習で終わることもある。そこで、幼児とのふれあい体験を授業だけで抱えず、進路学習の一環として行うことのある、保育園での職業実習なども大切な体験であるとの見方を重視し、意図的に教育活動の場に取り入れることにした。

また、活動の場を学校を越えて、地域にも広げてみることにした。地域には多元的な価値観のある人、専門的な知識や技能を有している人、そして『保育』の専門家である母親が存在している。生徒が地域とかかわることで、地域の人々も中学生に関心を寄せ、好意的に教育に参加してくれると考えた。

研究構想図



(2) 研究の視点

- ◎ 実践的、体験的学習の工夫
- ◎ 地域とのかかわり方の工夫
- 課題解決学習の展開
- 教材・教具の開発
- 評価

ア 実践的、体験的学習の工夫

- ・導入での例 保育実習や幼児の観察、自分の幼児期の様子を家の人に聞く、育児日記・アルバムやビデオをみる
母子手帳の活用、保育用VTRの視聴
自分史づくり、コンピューターでの子育て診断
家の人からメッセージをもらう
- ・展開での例 おやつづくり、市販のベビーフードの試食
新聞紙を使っての遊び体験
折り紙折り、絵本を読む、絵本づくり
身近な材料でおもちゃを作る
自然観察体験（五感を使って）
幼児に関する新聞記事を読む
幼児服づくり
保育実習
- ・まとめでの例 自分史づくりと展示

イ 地域とのかかわり方の工夫

〈保健センターとの共催〉の例

足利市保健センターでは、数年前から思春期体験講座を開き、中学生と母親学級に通う親子（主に入園前の乳幼児と母親）とのふれあい体験の機会を設けていたが、会場を中学校や地域の公民館に移動して実施ができるようになった。保健センターの職員がリーダーとなり、中学生に妊婦体験をさせたり、乳幼児の抱き方や遊び方を指導してくれる。

〈PTA行事として〉の例

PTAの活動の1つとして保育教室がある。各町内の役員が近所に住む乳幼児の親子に行事の案内と参加の勧誘をし、中学校で遊びを中心とした交流会をもつという内容である。遊びの準備は中学生が行い、PTAの役員は裏方的なことと中学生への声掛けや遊び方での支援を行う。中学2年生でも十分に活動ができる。また、参加している乳幼児の親と中学生が顔見知りであると、思わぬ会話もでき、地域での存在感が出てくる。

〈園の行事に中学生が参加〉の例

保育園の運動会にボランティアとして参加し、競技の補助的な役割を任せてもらった。また、恒例となると園側でも中学生が競技に参加できるようにあらかじめプログラムも用意してくれる。

☆その他の例は幼児との交流体験（平成11年度）を参照

幼児との交流体験

(平成11年度)

学校名	体験の方法	保育の授業としての交流				授業外の交流(1~3年対象)						
		保育園等での保育実習1回	保育園等での保育実習2回	との共催 保健センター	学校に幼児招待	園の行事に参加	園児が参加 中学校の行事に	職業調べや 実習に参加	ボランティア	スクールに 参加	福祉教育	その他
A 中		◎		○		○	○	○	○			○PTA行事
B 中		◎		○	○		△	○				
C 中		◎	◎					○	○			
D 中		◎		○		△	○	○				
E 中		△										○おもちゃを持参
F 中		◎	◎	○	○			○	○	○		
G 中		◎			○		○		○			○放課後の自主交流
H 中		◎		△			○	○				
I 中		◎		△		○	○	○	○			○タコあげ
J 中 (家庭科教員いない)		◎		○			○	○	○			
K 中 (技術・家庭科教員いない)								○				

◎は3年生全員体験、○はクラス単位または一部の生徒が体験、△は検討中

年間指導計画(25時間)

☆…新指導要領に関連

指導単元	時間	指導項目	指導内容
幼児を知る	8	<ul style="list-style-type: none"> ・生命誕生 ・自分史作り ・幼稚園、保育所訪問 ・赤ちゃんふれあい体験 	<ul style="list-style-type: none"> ・生命誕生、命の大切さに気づかされる。 ☆自分の成長を振り返り、周囲の人々の援助に気づかせる。 ☆幼児とふれあい、幼児に関心をもたせる。(課題把握) ・赤ちゃんや母親とふれあい、関心を高めさせる。
幼児の心身の発達	2	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児のからだの発達 ・幼児の心の発達 	<ul style="list-style-type: none"> ☆幼児のからだの発達や運動機能の発達について考えさせる。 ☆情緒、ことば、社会性について考えさせる。 ☆心の発達に必要な、周囲の人々の援助に気づかせる。
幼児の生活	8	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の生活習慣 ・幼児の遊び 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児期に生活習慣を形成させる必要性について考えさせる。 ・基本的な生活習慣、社会的な生活習慣を知らせる。 ・心身の発達に応じた遊びを知り、必要性を理解させる。

		<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児の被服 ・ 幼児の食生活 	<p>(課題研究)</p> <p>☆おもちゃの役割を知り、幼児にあったおもちゃを考えさせる。(課題研究)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児の体型や発達段階に合った被服について考えさせる。(課題研究) ・ 幼児期の食生活の特徴と重要性を知らせる。 ・ おやつ必要性を知り、簡単なおやつを製作させる。(課題研究)
招待学習	4	・ 幼児招待	☆今まで学習してきたことを生かし、幼児と楽しく安全に交流させる。(課題解決)
幼児の発達と環境	3	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児の発達と環境 ・ 幼児の安全な保育環境 ・ まとめ 	<p>☆幼児の心身の発達に重要な、家庭と社会の役割について考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 安全な保育環境について考え、地域社会の一員としての幼児へのかかわり方を考えさせる。 ・ 学習したことをもとに、自分史を発展させ、自分の将来を考えさせる。

ウ 課題解決学習の展開

〈指導計画作成で配慮した点〉

- ・ 保育領域の時間は25時間とした。これは学校によって20時間～30時間と幅があるため、弾力的に扱えるようにしたからである。
- ・ 実践的、体験的学習の内容と位置付け
これから学習したい内容についてのアンケートでは、男女とも「幼児の遊び」に関心が高い。これを受けて遊びを中心とした配列を組み立てた。
- ・ 実践的、体験的学習を中心にする、基礎・基本がおろそかになりがちなので、最低限指導すべき内容を確認した。
- ・ 保育学習への興味・関心が薄いので、導入の時間を多く取り、幼児の姿を実感としてとらえられるようにした。
- ・ 新学習指導要領との関連を図った。

〈授業実践で配慮した点〉

- ・ 課題設定の場面を導入や展開の活動の中で取り入れた。学習内容や場面によって、個人やグループとしての課題になるが、興味・関心の持続をはかるようにした。
- ・ 学習カードを活用し、自分の課題を明確にした。

☆年間指導計画P56～P57参照

エ 教材・教具の工夫

- ・ オーバーヘッドカメラ等の機器の活用
- ・ 新生児人形づくり

- ・ 幼児の身長の変り変わり図（実物大）
- ・ 保育園での幼児の生活をVTRに収録
- ・ コンピュータソフト（子育て診断）の作成

オ 評価

導入からノートやプリントを使って、保育の学習内容や幼児についての感想を記録してきた。それをファイルにまとめ、振り返りの学習で活用することで、自分の気持ちの様子や変化が分かる。それによって、これまでの自分の成長にかかわってきた人達や環境に視野が広がり、思いやりのあるあたたかい心で、いろいろな人とかかわっていけるようになる。

(3) 研究の経過

ア 平成7年・・・実践的、体験的学習の工夫

- ・ 保育実習を2回実施
1回目は導入で幼児の観察が中心。2回目は生徒が製作したおもちゃを持っての訪問。
- ・ 教材・教具づくり

イ 平成8年・・・教材・教具の開発、地域とのかかわり方の工夫

- ・ 導入の工夫
他教科（保健・道徳）との関連を図った生命の尊さを考える授業。
親からのメッセージを取り入れた授業。
- ・ 教育機器の活用
コンピュータ、オーバーヘッドカメラを使っての授業。
- ・ 外部講師との授業
保健婦さんとのT・T（幼児の食事）

ウ 平成9年・・・教材・教具の開発

- ・ 導入の工夫
男性教師のかかわり
- ・ 教育機器の活用
コンピュータソフトの改良

エ 平成10年・・・地域とのかかわり方の工夫、課題学習の展開

- ・ 保育実習と2回の幼児招待を取り入れた授業
導入で保育実習を取り入れ、幼児の実際の姿をとらえながら、幼児が喜びそうなおもちゃは何か課題をもたせた。1回目の幼児招待では、生徒と幼児がグループになり、一緒におもちゃづくりを行った。色塗りや絵を書いたり、幼児から意見を聞くなど幼児が参加できるようにした。2回目の幼児招待では、作ったおもちゃで遊ぶ授業を展開した。

オ 平成11年（本年度）・地域とのかかわり方の工夫、課題学習の展開

- ・ 保育実習と招待学習を取り入れた授業
前年度の研究を受けての取組みではあるが、これまで学習してきた内容（幼児の心身の発達や幼児の生活）を生かしながら、幼児についての理解を深めることをねらいとしている。生徒が個々やグループで把握した課題を解決させる学習の部分である。

4 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

ア 保育の授業の中で取り入れた、家の人から自分の幼児期の様子を聞いたり、ビデオの視聴などをはじめ、折り紙や絵本遊びなどの実践的、体験的学習の工夫が、幼児を理解する点で成果を表していることは、保育のまとめでのアンケートから確かめることができる。男女で数値に違いがあるものの、傾向としてはプラスに向いている。しかしビデオや写真を活用して幼児について学習したとしても、実際に幼児とのふれあいのない学習は、「幼児の姿」を実感としてとらえにくくなる。

やはり、目指す生徒像に迫るためには、幼児と直接ふれあうことが大変重要になる。それは、ふれあい体験後の生徒の感想文の中にある、感動や喜びを綴った生きたことばと表情からもわかる。また、アンケートの結果の中でも顕著に表れている。

イ 課題をつかむために必要なことは、学習に対する興味・関心をもつことである。生徒の目が学習に向いている中でこそ「なぜ？」の疑問が生れ、考える素地ができる。保育学習に入る前のアンケートでは、興味・関心が低かったが、導入の段階で保育実習を取り入れたことにより、生徒は「幼児の姿」が視野に入り、現実的な学習として取り組むことができた。学習を進めていく過程でいくつかの課題をもち、解決することの積み重ねが、課題解決の力となり、問題解決の能力を高めることにつながっていると考える。この点においても、幼児との直接的なふれあい体験は価値が大きい。

(2) 今後の課題

ア 足利地区として幼児とのふれあい体験の場や方法をいくつか提案してきたが、これ以外にも手段はあると考えられるので、さらに検討していきたい。また行政でも子育て支援政策に取り組んでいるので、地域の施設と相談もできると考える。保育実習を実施する上で、クラス数が多くて回数を増やせないこともあるが、本日の授業発表の中学校のように、地域にある複数の幼稚園や保育所に協力をお願いすることもできる。

イ 現行の保育領域における目標では、幼児に対する理解や関心を高めることにねらいがあるため、心の変容を確かめる方法として、学習カードに気持ちなどを記入させた。また、生徒同士の会話や保育実習後の自発的な幼児との交流からも心の変容を感じとることができるが、心の内面を適切に評価する点においては、まだ研究の余地がある。

ウ 来年度から学習指導要領の移行期に入るが、『家庭生活』と『保育』を整理して「家庭の機能」を柱にした指導計画作成が急務である。幼児の生活や成長をもとにして、自分の立場と役割を自覚するとともに、家族や周囲の人々への感謝の気持ちを実感することで、家庭の機能を理解させることにつなげていくが、生徒の発達段階を考慮した指導計画づくりをする必要があると考える。また、指導計画を作成するにあたり、学習内容が家庭での生活に生かされるよう、これまで以上に家庭との連携を大切にすることが必要である。

評

21世紀に向けて、我が国の社会は国際化、情報化、科学技術の発展あるいは高齢化、そして少子化等、大きく変化してきています。

このような社会の変化の中で少子化や保育に関して、育児放棄や幼児虐待など子育てをめぐる様々な問題が大きく課題視されています。

子育てに深く関連する学習として以前から取り上げられていた中学校技術・家庭科の選択履修領域の1つである「保育」の学習が、平成10年に打ち出された新学習指導要領では、「家族と家庭生活」という大きな枠組みの中に繰り入れられ、全ての生徒が履修するように改訂されました。

本研究はこの「保育」の学習を通して、生徒の問題解決能力を高める指導を様々な実践をとおして研究されました。

研究の特色をまとめてみますと、

(1) 幼児とのふれあい体験を重視した学習活動の展開

- ・幼稚園や保育園に出向いてのふれあい体験や、幼児を学校に招いてのふれあい体験など、幼児と実際にふれあう体験を通した学習活動の展開が研究された。
- ・子育て中の母親の協力を得て、実際に乳児を見たり抱いてみる体験など、実体験を重視した学習活動が展開された。

(2) 地域社会との関わり方を工夫した学習活動の展開

- ・学区内にある幼稚園や保育園と連携協力し、幼児と生徒との交流を通した学習活動が展開された。
- ・市保健センターの保健婦や乳児を抱えたお母さんなどを講師として招いた学習展開など、生徒が興味をもって取り組むための学習展開の工夫がなされた。

(3) 課題解決能力を高めるための教材・教具の工夫

- ・新生児の人形作りや、等身大の幼児の身長の変遷図作成など重さや大きさを感覚的に理解することができるような教具の工夫がされた。
- ・コンピュータやオーバーヘッドカメラの利用など、生徒がわかりやすく、しかも、興味をもって学習に取り組むような教材・教具の工夫がされた。
- ・幼児の成長記録をVTRで記録・編集し視覚的に幼児について学習できる教材作りを行った。

このような本研究は、生徒が単なる知識でなく、実体験で得た感覚を通して問題解決能力を高めていく学習指導の工夫という点で大きな成果をあげてくれました。この成果は技術・家庭科だけでなくどの教科の研究にも大いに参考になるものと確信しています。

今後の課題として地域との交流体験の充実や、生徒の発達段階を考慮した指導計画の作成を掲げていますが、本研究を礎に、課題として掲げている地域との交流体験の充実や、生徒の発達段階を考慮した指導計画の作成を目指して、ますます研究を深められますことを期待いたします。